

仙台・高松・札幌・名古屋各地裁で弁論開かれる

秋田事案第 8 回口頭弁論 = グラフで分限免職回避できたことを証明 =

お礼を述べる原告の小畑さん(左)



1 月 21 日に仙台地裁にて秋田事案第 8 回口頭弁論が開かれ 72 名が参加しました。今回は、被告(国側)が準備書面(5)を提出し、準備書面(4)で反論できなかった部分を追加反論しましたが、原告弁護団は、その内容が国や厚生労働省の分限免職回避努力などの責任を微妙にはぐらかした内容となっていることを

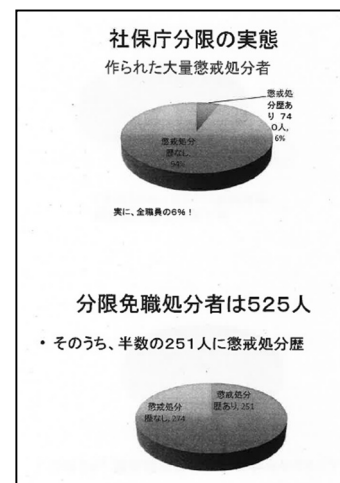
厳しく追及しました。また虻川弁護士が、分限免職を回避できたことをグラフにし、数字を示して明確に指定しました。しかし被告側は、自らの準備書面の不備を棚に上げ、原告弁護団が指摘した事項を書面で提出するように求めるなど、裁判の引き延ばしをはかりました。

報告集会では、国公東北ブロックの松木議長が「阪神淡路大震災が今年で 20 年目になることが報道されていた。当時の映像を見ると、4 年前の東日本大震災がフラッシュバックして眠れなかった。職場ではまだまだ復興途上であり大変な状況だ。しかし、職場を取り戻すたたいはそれ以上に大変なことだ。何回か裁判傍聴しているが、裁判長は原告の訴えを聞いてくれるようになってきたのではないかな。引き続き奮闘したい」と挨拶しました。原告の小畑さんより「多くの皆さんの参加に感謝するとともに、3 月 25 日の京都の判決を期待している。引き続きよろしくお願ひしたい」とお礼が述べられました。

弁護団からは、狩野弁護士が「国側から準備書面が提出されたが、社会保険庁が廃止になる前に出された厚生労働省の文書の中にも、分限免職回避義務が厚生労働大臣にあるとしているにもかかわらず、分限回避義務は秋田事務局長にあるとしている。秋田事務局長は何もできなかった、そんな権限もなかったことは明らかになっている」と報告しました。

虻川弁護士からは「分限回避ができたことを、一目でわかるようにパワーポイントで図表を作成し、法廷で映し出して陳述したかったが機械がなくてできなかった。わかりやすく分限免職回避ができたことを裁判所に理解してもらうために引き続き頑張りたい」と報告しました。

次回は、4 月 22 日に進行協議が行われ今後の裁判の進め方が協議されます。



虻川弁護士が作成した図

愛媛事案第 4 回口頭弁論 = 児島さん・出原さんが陳述 =

1 月 26 日、高松地裁にて愛媛事案の第 4 回口頭弁論が開かれ、四国 4 県の県労連議長も傍聴参加し、全体で 70 人が参加しました。弁論は、分限回避努力が全く尽くされなかったことや、原告がいか

に優秀であったかを準備書面（２）として裁判所に提出し、その要旨を原告の児島さんと出原さんが法廷で陳述しました。児島さんは、「３６年以上社会保険庁に勤務し、担当していた業務が評価され事務所が長官表彰も受けた。年金記録問題の対応も最前線で奮闘してきた。厚生労働省への転任面接の評価は５級で５０歳代の理由で悪い評価を受けたことは、面接官の恣意的な判断であり分限免職回避のために行われた面接ではない」と陳述しました。また、出原さんは「厚生労働省への転任面接では、声が小さい。日本年金機構の面接では公務員意識が抜けないなどとして採用されなかった。日本年金機構は不採用としながら、分限免職後に受けた准職員の採用試験に合格し、その後正規職員にもなった。この間の人事評価もＡないしＢであり、なぜ最初から正規職員に採用されなかったのか到底納得できない」と陳述しました。



報告集会は愛媛県労連の今井議長の司会で始まり、香川県労連の堤議長が「本日は、四国４県労連の議長が傍聴参加している。労働者を簡単に解雇できる法整備がされようとしており、このようなことを許さないたたかいが必要であり、この裁判にも勝利しなければならない」と挨拶しました。井上弁護士から「児島さんは、分限回避が何もなされていない。森本さんは懲戒処分歴があることで不採用はおかしなこと。出原さんは陳述の通り、日本年金機構で不採用となったことがおかしい。裁判所は、被告（国側）に雇用調整本部を使わなかった理由の書面を出せと行っている。今後は、京都の判決を待って作戦を考える」と報告しました。京都原告団長の谷口さんは、「３月２５日の京都の判決で勝利し、全国の勝利へつなげたい」と挨拶しました。なお、弁論前には、団体署名１４１筆、個人署名１８,４９７筆を裁判所に提出しました。

次回、第５回口頭弁論は４月２０日（月）１３時３０分から開かれます。

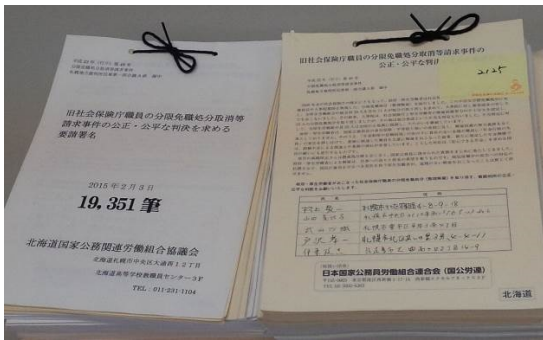
北海道第１４回口頭弁論 = 署名 19,351 筆を提出 =

２月３日札幌地裁にて北海道事案の第１４回口頭弁論が開かれ３５名が参加しました。弁論では、被告（国側）が、証人として横尾年裕氏（当時の北海道厚生局・総務管理官）の陳述書が出されましたが、原告側が求める清水美智夫氏（当時の北海道厚生局長）の尋問については、横尾氏が陳述すれば証言する意味がないとしましたが、弁護団の追及により陳述書を提出することとなりました。裁判所は、藤原伸次氏（当時の社会保険庁総務部総務課長補佐）と仙庭信行氏（当時の北海道社会保険事務局総務課長）、原告の高嶋さんは証人採用しましたが、越後さん（北海道原告）、盛田さん（全厚生労働組合中央執行委員長）については次回までに整理するとなりました。



裁判前集会で挨拶する神保弁護士（中央）と原告の高嶋（右側）さん

報告集会で、神保弁護士から「横尾氏の陳述書が提出されたが、内容は特に目新しいことは記載されておらず、横尾氏が清水氏に具体的な報告をしたことは何も記載されていない。また、横尾氏は途中で異動しておりあらためて清水氏の証人尋問を要求した」と報告しました。原告の高嶋さんからは「今ま



提出された署名 19,351 筆

13 時 30 分からとなりました。

愛知第 6 回口頭弁論 = 提訴から 1 年、分限免職回避努

力がされず。あらためて陳述＝

2 月 4 日、名古屋地裁にて愛知事案の第 6 回弁論が開かれ 74 人が傍聴参加しました。弁論前に行われた名古屋地裁前集会で伊藤勤也弁護士は「2014 年 2 月 5 日に提訴してちょうど一年、6 回の弁論を行ってきた。今日は、分限免職回避努力がされなかったことを詳しく準備書面として提出した。」と挨拶し、弁論に臨みました。弁論では、原告側が提出した準備書面（5）の要旨を伊藤勤也弁護士が陳述し、国は過去から分限免職を回避する努力をしてきたのに、社会保険庁職員には回避努力は全くされなかったことを陳述しました。また、裁判所から被告（国側）の提出した準備書面の（2）と（3）で分限免職回避義務の主体が相違している点を指摘するなど、被告（国側）の陳述が杜撰であることが明らかになりました。

報告集会で、中部闘争団長の磯貝さんが「弁論前に署名 5,000 筆を提出し、累計 10,000 筆を提出した。引き続きご協力お願いします」と挨拶し、伊藤勤也弁護士から「裁判長が被告に対して相違点を確認していたが、被告代理人が的を射ない回答をしていたので再度検証する。書面では、厚生労働省が分限回避努力を色々と出来たことを数字で示して主張した。次回も多くの傍聴をお願いしたい」と報告しました。全厚生 OB の杉崎さんから「厚生労働省が 2010 年 1 月以降に 113 人もの予算を確保しながら全く使わなかったことは、分限免職を意図的に行ったとしか思えず、大変憤りを感じる。OB 会では、労働組合のつながり以外の方々からもカンパをいただき 220 万円以上集まった。引き続き頑張りたい」と決意を述べられました。また、連帯する争議の仲間からの訴えもされました。原告の女性からは、「杉崎さんの話を聞いて、いろんな方に支援いただいていることに感謝したい」「書面を見てあらためて怒りを感じる」など、共に傍聴参加のお礼と引き続く支援を訴え報告集会を終えました。

次回、第 7 回弁論は 3 月 26 日（木）13 時 30 分から、次々回第 8 回弁論が 5 月 11 日 11 時から開かれます。（国公労連速報 3124 号より）

各地裁あて署名に、引き続きご協力をお願いします。



報告する伊藤勤也弁護士

事務局

〒604-8854

京都市中京区壬生仙念町 30-2 ラボール京都地下

京都国公気付 :075-801-7875 FAX:075-801-7876（共に京都国公）

mail:zenkousei-tousoudan@xug.biglobe.ne.jp（全厚生闘争団メールアドレス）

http://www.geocities.jp/zks_sasaerukai/index.html（全厚生闘争団を支える会ホームページ）